

40446

教科書文庫

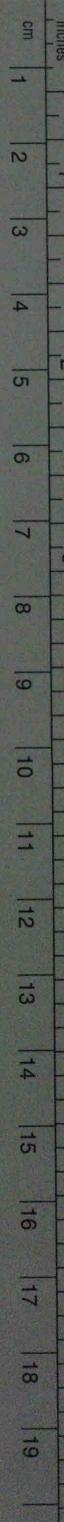
4
110
31-1915
25000
46889

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

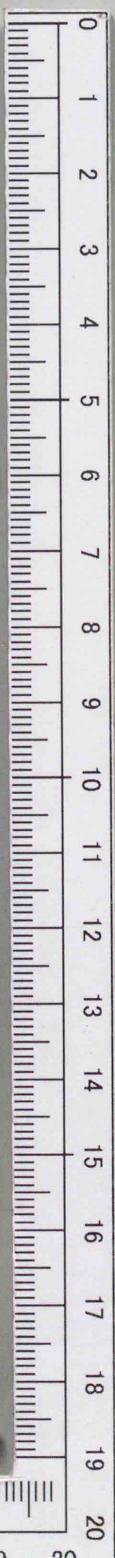
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
110
31-1915
2500046889

文部省 複式編制學校兒童用 第三四學年 新編小學修身書

教科書文庫

4

110

31-1915

2500046889



文 部 省

複式編制學校兒童用乙
第三四學年 常小學修身書

登録番号

46889

分類

375.9

M

広島大学図書

2500046889



もくろく

第一	おやのおん	一	第十三	皇后陛下	二十六
第二	かうかう	四	第十四	能久親王	二十九
第三	きょうだい 兄弟なかよくせよ	六	第十五	ちゅうくんあいこく	三十三
第四	しごとにほげめ	七	第十六	ちゅうゆう	三十六
第五	しんるゐ	九	第十七	やくそくを守れ	三十九
第六	學問をつとめよ	十一	第十八	しやうぢき	四十
第七	友だちはなすけあへ	十四	第十九	おんをわされるな	四十三
第八	からだについてのこころえ	十六	第二十	法令を重んぜよ	四十六
第九	めいしんにおちいるな	十九	第二十一	共同	四十八
第十	そせんをたつとべ	二十一	第二十二	こうえきをはかれ	五十一
第十一	ぎやうぎ	二十二	第二十三	じせん	五十三
第十二	けんそん	二十四	第二十四	よい日本人	五七

朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我力臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我力國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我力皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ惇ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

第一　おやのおん

二宮金次郎の家は大そうびんぼふであつたので、父母は金次郎たちをそだてるために、色々くらうをしました。

ある時父がびやうきになつて、おいしやにかかりました。くすりのおれいが出来ませんので、しかたがなく、でんぢを賣りました。びやうきがなほつてから、父はおいしやの

家へおれいに行
き、そのかねを出
しましたが、おい
しやはきのどく
に思つて、うけ取
りません。父はお
いしやのしんせつ
をよろこび、しひてそ



の半ぶんをおいてかへりました。その時金
次郎は門口に出て父のかへりをまつてゐ
ました。父はうれしさうなかほをしてかへ
つて来て、金次郎においしやのしんせつを
はなしてきかせ、これでおまへたちをそだ
てることが出来る』といひました。

父母ノオノハ山ヨリモ高ク、海ヨリモフ
カシ。

第二　かうかう

金次郎はかうかうな子で、小さい時から父
母の手だすけをしました。

金次郎が十四の時父がなくなりました。母
はくらしにこまつて、すゑの子をしんるゐ
へあづけましたが、そのばんからよくねな
いでかなしんでゐました。金次郎はこれは
母があの弟のことをしんぱいして居られ

るからであらうと思ひ、「私がはたらいて弟をやしなひますから、よびもどして下さい」とねがひました。母はその夜すぐにしんるゐの家へ行



つて、すゑの子をつれてかへり、おや子いつ

しよにあつまつて大そようろこびました。

第三 兄弟なかよくせよ

それから金次郎は朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきぎをとつてそれを賣りました。又夜



六

複ひ三四

はなはをなつたり、わらぢをつくつたりして、おそらくまではたらきました。

金次郎はこんなにして少しのじかんもむだにせず、よくはたらいて弟たちをやしながらました。

第四 しごとにはげめ

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶしんに出ました。しごとをすまして、家へか

七

へりますと、わらぢを
つくつて、あくる朝し
ごとばへ持つて行き
ました。そして人々に
「私はまだ一人前のし
ごとが出来ませんの
で、みなさまのおせわ
になります。これはお



れいのしるしてございます」といつて、その
わらぢをおくりました。

その上金次郎は人の休んでゐるひまに
も、土や石をはこんで、力のかぎりはたらき
ました。それでかへつて、おとなよりもたく
さんしごとをしたと申します。

第五 しんるゐ

金次郎が十六の時、母がびやうきにかかり

ました。金次郎は大
そうしんぱいして
色色かいはうしま
したけれども、どう
とうなくなりまし
た。金次郎はたのみ
にする母にわかれ、
二人の小さい弟と、あと



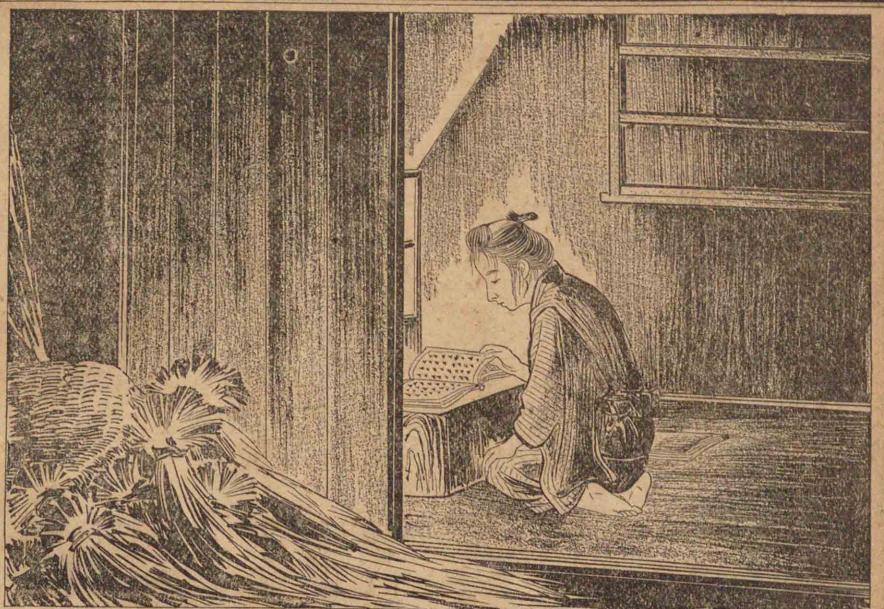
複乙三四

にのこつてどんなになげいたでせう。
やがてしんるゐの人たちがよりあつて、三
人のものが大きくなるまで、わけてあづか
ることにしよう。とさうだんしました。それ
で金次郎はまんべゑといふをぢの家へ引
取られました。

第六 學問をつとめよ

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、い

ちにちはたらいて、夜になると、本をよみ、字をならひ、さんじゅつのかいこをしました。をぢが「夜學」のためにあぶらをつかふのはよくない」といひましたから、金次郎はじぶ



んであぶらなをつくり、そのたねを賣つてあぶらを買ひ、まいばんべんきやうしました。をぢが又「本をよむよりは夜もうちのしごとをせよ」といひましたから、金次郎は夜おそらくまでしごとをして、そのあとで學問をしました。

金次郎は二十さいの時じぶんの家へかへり、せいだしてはたらいて、のちにはえらい

人になりました。

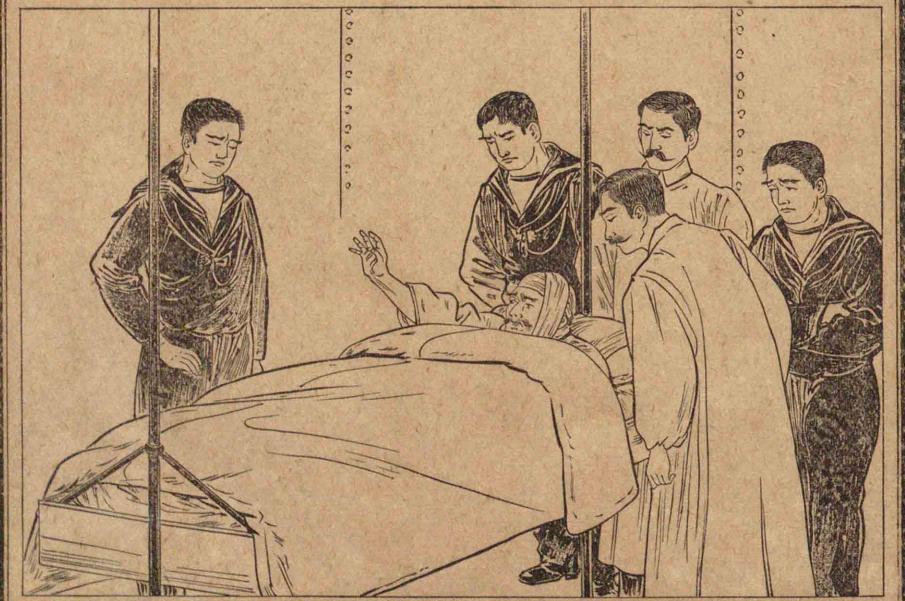
玉タマミガカザレバ光ナシ、人學バザレバ智ナシ。

大藏文庫蔵書

十四

第七 友だちはたすけあへ
かいぐん一とうするへい坂井定三郎は、ぐ
んかんにゐた友だちがべんきやうのため
に大阪おほへ行つたので、じぶんのきふれうの
中から時時金をおくつてたすけてやりま

した。めいぢ三十八年
五月日本海かいのいくさ
のあつた少し前にも、
金をおくらうとしま
したけれども、つがふ
がわるかつたので人
からかりておくりま
した。間もなく定三郎



複二三四

十五

はいくさに出て重いきずをうけました。とてもたすかるまいと思ひましたので、そばにゐた友だちに、かりた金のしまつをたのんで、それきり氣がとほくなつてしまひました。しばらくすると、にはかに大きなこゑで大阪の友だちの名をよび「しつかりたのむぞ」といつて、そのままなくなりました。

第八 からだについてのこころえ

伴信友^{ばん のぶとも}は毎日朝起きた時と夜ねる時に、姿勢^{せき}を正しくしてすわり、三四十ペんもしんこきふをし、又毎朝つめたい水であたまをひやしました。その外、朝ばん弓を引いたり、はをつぶした刀をふつたりして、よくうんどうしました。かやうに信友はからだをたいせつにしたので、年をとつてもぢやうぶで、たくさんの中をあらはすことが出来ま

した。

すべてからだをぢやうぶにするには、姿勢
に氣をつけ、うんど
うをおこたらず、着
物はせいけつにし、
ねむりやしよくじ
は、きそく正しくし
なけばなりませ



ん。又からだにあかをつけておいたり、うす
ぐらい所で物を見たりしてはなりません。

第九 めいしんにおちいるな

ある町に目をわづらつてゐた人がありま
した。めいしんのふかい人で、ある所のお水
をいただいて、それを目にさしてゐましたが、
が、日日わるくなるばかりであります。あ
る日しんるゐのものが見まひに来ておど

ろいて、むりにおい
しやの所へつれて
行きました。おいし
やはよく見て、早く
お出でになればよ
かつたのに、今にな
つては、とてもなほ
りません」ともうしました。



二七



第十 そせんをたつとべ

稻生はるはまい月一
日十五日、その外そせ
んの忌日には朝早く
からおき、からだをき
よめて、ぶつだんのさ
うぢをし、花をささげ、
かうをたき、色々そな

複三四

へ物をして、つつしんでおまつりをしました。もし人からめづらしいくだものなどをもらふことがあるときつとぶつだんにそなへました。

第十一 ぎやうぎ

まつだいらよしふき
松平好房は小さい時からぎやうぎのよい人で、かりそめにも父母の居られる方へ足をのばしたことはありませんでした。よそ

へ行くときは、そのことを父母につげ、かへつて來たときは、からず父母の前へ出て、その日あつたことをくはしくはなしました。父母から物をいただくときは、ていねいにおじぎをしてそれを受け、いつまでもた



複二三四

いせつに持つて居ました。又人が父母のはなしをすると、かならず居なほつてききました。

シタシキ中ニモレイギアリ。

第十二 けんそん

吉田松陰のでしに久坂玄瑞と高杉晋作といふ二人のすぐれた人がありました。玄瑞はおこなひをつつしみ學問にはげみまし

たので、松陰はつねに玄瑞をほめて居ました。晋作ははじめはべんきやうしませんでしたが、後には心をあらためてべんきやうして大そう學問が進みましたから、松陰はことをきめるときにもく晋作とさうだん



複二三四

しました。玄瑞は晉作をほめて、高杉君はえらい人だ。じぶんはおよばない」と言ひますと、晉作は「久坂君こそりつぱな人だ。じぶんはおよばない」と言つて玄瑞をほめました。松陰は二人がたがひにけんそんしてほめ合つて居るのをきいて大そうよろこびました。

第十三 皇后陛下へいわいか

皇后陛下はお小さい時からしつそにあらせられて、おめしものもはでな物はおもちひにならず、學校へおかよひなされるにも、たいていはあるきになりました。



まだ九條家くじょうけにあらせられたとき、ある冬の朝早くおおきあそばしましたが、御うがひの湯がまだわいてゐませんでした。けれども少しもおかまひなく、水のままおつかひになりました。人人はおそれ多いことに思つて、あくる朝はいつもより早くおきて湯をわかしましたので、多くの人人にくらうをかけるのは、きのどくなことである。とお

ぼしめし、それから早くお湯をおつかひあそばすことをごゑんりよになりました。『かうたいし皇太子妃ひにならせられてからも、かひこをおかひあそばしたり、いくさの時にははうたいをおつくりになつて軍人にたまはつたり、その外ありがたいことがたくさんございます。

能久親王北白川宮はめいち二十八年五月臺灣の

三十



ぞくを御せいばつ
なされるために臺灣へおわたりになりました。おつきにな
なつても、お休みになるやうな家がなりので、砂の上にま

くをはり、そまつないすをおいて御座所と
しました。又御しよくじにはさつまいもの
むしゃきをさし上げました。それからだん
だん軍をお進めになりましたが、へいしと
ともに大そう御なんぎをなされ、御病氣に
おりになつても、少しもおいとひなされ
ずおさしづなさいました。
ぞくはたいてい平らぎましたが、南の方に

複三四

複三四

まだのこりのぞくがゐましたので、その方へお進みになりました。そのとちゅう、又御病氣におかかりなさいました。ぐんいは「おとどまりになつて御やうじやうあそばされやうに」と申し上げましたが、親王は「わが身のため國のことをおろそかにすることは出來ぬ。いきのあるまでつづける」とおほせられ、きゆうくつなかごにのつて、な

ほお進みになりました。

親王はかやうに國のためにおつぐしになりましたが、かなしいことには、御病氣が重くなつて、まもなくおかくれになりました。

第十五　ちゆうくんあいこく

昔和氣清麻呂といふちゆうぎな人がありました。その時道鏡といふ僧そうが高いくらゐに居ましたが、道鏡にへつらふものが、時の

天皇に「うさはちまんの神が、道鏡を天皇の御くらゐにつけたなら、天下太平であらうと御をしへになりました。」と申し上げました。天皇は大そう御しんぱいあそばされて、清麻呂に「うさへ行つて今い



ちど神の御をしへをうけたまはつてまるれ」と御いひつけになりました。

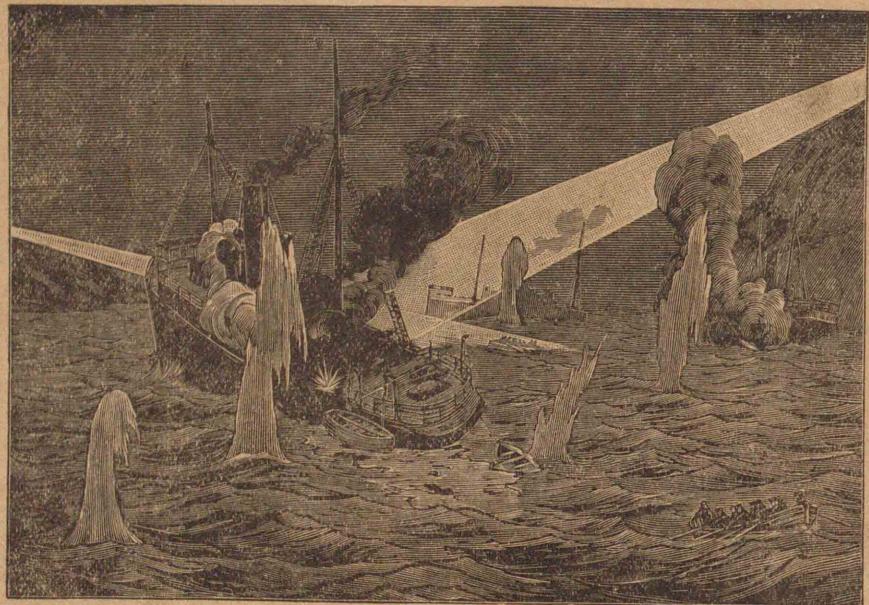
道鏡は清麻呂をよんじ、「じぶんが天皇になれたなら、おまへに高いくらゐをさづけよう」と申しました。清麻呂はうさへ行つて神の御をしへをうけ、やがてかへつて来て、天皇の御前へ出て、道鏡のきいて居るのもおそれず、臣下のみぶんで天皇の御くらゐを

のぞむやうなものは早くのぞけと、御つげになりました。と申し上げました。

第十六 ちゆうゆう

めいぢ三十七年わが國がロシヤといくさをしたとき、わが國のかんたいは、てきのぐんかんが旅順りょじゅんから出られないやうに、きせんをしづめて、みなと口をへいそくしました。これは大そうあぶないしごとであります。

したが、三どまでおこなつて、思ひどほりにしとげました。へいそくたいの人たちはちゆうぎなぐんじんばかりであつたから、くらい夜中に、みなと口へすすみ、てきのたい



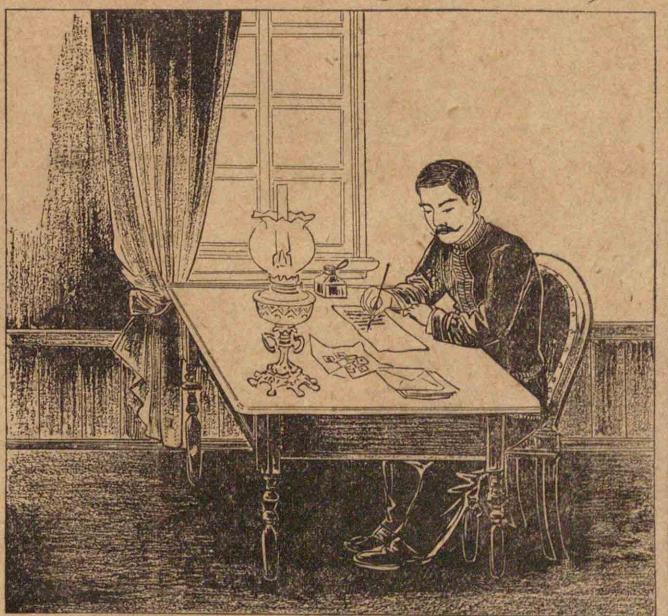
はうのたまが雨あられのやうにふりそそぐ中で、いさましくはたらきました。又行く人をきめるときには、いつものぞみてが多くて、さきに行つた人はぜひいま一ど行つてやくめをつくしたないとねがひ、さきにもれた人はこんどこそは代りたいと申し立て、だれにきめてよいか、こまつたほどであります。

第十七 やくそくを守れ

廣瀬武夫がロシヤへ行くとき、ある子どもに「かへりにはロシヤのいうびんきつてをたくさんみやげに上げよう」とやくそくしました。

武夫はロシヤから日本へかへる道で、大そうなんぎな所を通ることになりました。その前の夜、武夫はやどやでもしもぶじにか

へれなかつたら、いう
びんきつてをまつて
ゐる子どもは、どんな
に力おとしをするだ
らう。と思ひました。そ
れですぐにはその子ど
もにあてた手紙をかいて、ロシヤのいうび
んきつてを入れ、それをじぶんの兄さんの



所へおくつて、「もし私が死んだら、この手紙
をとどけて下さい」とたのんでやりました。

第十八 しやうぢき

ワシントンは父からもらつたをのを持つ
て、にはへあそびに出ました。そこには色々
な木がうゑてありましたが、中に父がこと
さらだいじにして居たさくらがありまし
た。ワシントンは何げなく、をのをためさう



と思つて、それを切りたふしました。
しばらくして父は
にはへ出て来て、ご
のさくらはだれが
切つた。とワシント
ンにたづねました。
ワシントンははじ

めてわるいことをしたと心づいて、私が切りました。と少しもかくさないで答へてわびました。父はワシントンをだきかかへて、木を全くしてもをしくはない。おまへのしゃうぢきなのがうれしい。といつて大そうよろこびました。これはワシントンの六さいの時のことでありました。

第十九 おんをわすれるな

彌兵衛^{やへゑ}の主人はめしつかひのものがつみをおかしたかかりあひで島ながしになりました。彌兵衛は大そう主人のみの上をしんぱいし、どうかして島へみまひに行つて主人の心をなぐさめたいと思ひました。それでまづ一心に船をこぐことを習つて、とうとう船やくにんの手下になりました。そのうち折があつて、はるばる島へわたつて

主人にあひ、年ごろ心
がけてたくはへてお
いた品品をおくりま
した。

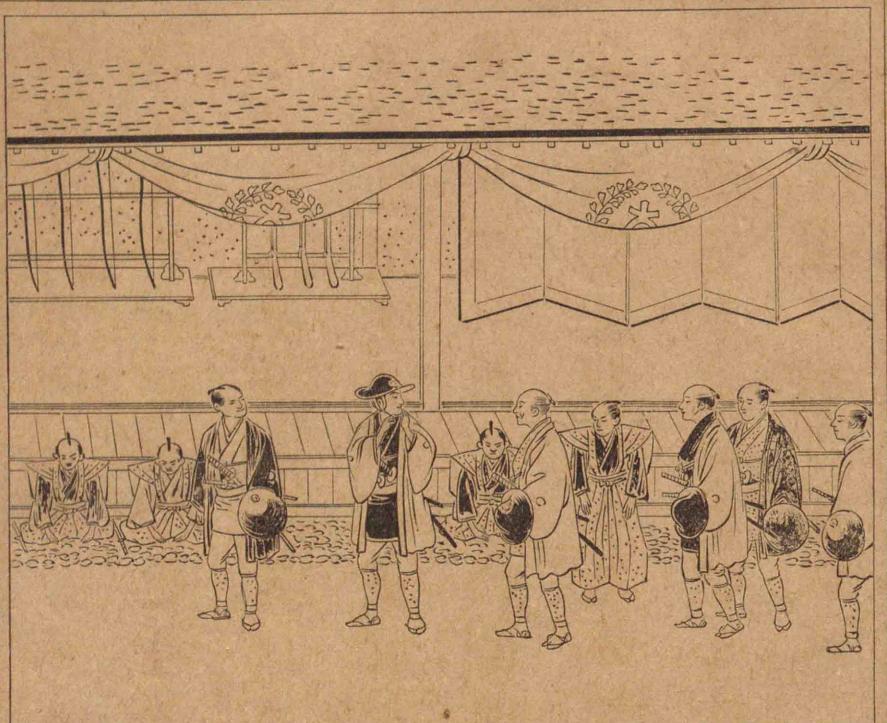
そののち主人がゆる
されてかへつて來ま
したので、彌兵衛はじぶんの持つてゐた物
を皆主人にさし出し、しんせつにせわをし



て、よくつかへました。

第二十 法令を重んぜよ

昔ばくふの重い役人に松平定信といふ人がありました。或年定信はかさをかぶつたまま相模の根府川の關所を通らうとしました。關所の役人が「規則によつてかさをお取り下さい」といひました。定信はこれを聞くとすぐにかさを取つて通りました。その



日やどについて、
定信は小田原藩
の家老に「今日か
さをかぶつたま
ま關所を通らう
としたのは、まこ
とにじぶんのふ
こころえであつ

た。それを心づけてくれた役人にあつくれ
いをつたへてくれよ。とあいさつしました。

第二十一 共同

ある時毛利元就はその子の隆元・元春・隆景
の三人に一つの書きものをわたしました。
その中に、三人とも毛利の家を大せつに思
ひ、たがひに少しどもへだて心をもつては
ならぬ。隆元は二人の弟を愛し、元春・隆景は

よく兄につかへよ。と
書きました。又隆元へ
べつの書きものをわ
たして、「あの書きもの
をまもりとして、家の
さかえをはかれよ。と
ねんごろにいましめ
ました。それで兄弟は



複二三四

いつしよに名をならべた請書うけしょを父にさし出し、三人共同して父のいましめをまもつて行きます」とちかひました。

その後隆元は早く死んで、その子の輝元が家をつぐことになりましたが、元春・隆景はよく元就のいましめをまもり、心を合せて輝元をたすけたので、毛利家は長くさかえることになりました。

第二十二 こうえきをはかれ

昔羽後の海べの村村では暴風ばうふうが砂をふきとばして、家や田をうづめることが度度ありました。栗田定之丞りりた さだのじょうといふ人がその害をふせがうと色々くふうしました。まづ海べの風のふく方にわらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろにやなぎやぐみの枝をささせましたら、皆めをふくやうにな

りました。そこでさら
に松の苗木をうゑさ
せました。それがしだ
いに大きくなつて、つ
ひにりつぱな林にな
りました。

定之丞は十八年の間
このことにはね折り



ましたが、そのために風や砂のうれへがな
くなつて麥・粟あは^{はた}などの畑も所々に開け、又し
ようろやはつだけも生ずるやうになりま
した。この地方の人人は今日までもそのお
んをありがたく思ひ、定之丞のために栗田
神社といふ社やしろを立てて年年おまつりをい
たします。

第二十三 じぜん

昔大ききんのあつた時、羽前の鶴岡に鈴木
今右衛門といふじぜんの心のふかい人が
ありました。田畠をはじめ諸道具まで賣つ
て多くの人をたすけました。今右衛門のつ
まも心だてのよい人で、ほどこしをするた
めに着物るゐを賣りはらひ、はれの衣裳が
二つだけのこつてゐましたが、着がへがな
くなつて外へ出ることが出來なければ、く

しゃかんざしの入用
もない。これらの物を
金にかへ、もつと多くの
の人をたすけませう。」
といつて、はれの衣裳
も、くしかんざしも、皆
皆賣つてしまひまし
た。



今右衛門ふうふにこの時十二さいになる
むすめがありました。ある日同じ年ごろの
女の子が物もらひに来ました。母はそれを
見て、むすめに「あの子はひとつへ物一枚でふ
るへてゐます。おまへの着てゐるわたいれ
を一枚やります。」といひましたら、むす
めはすぐによい方のわたいれをぬいで、そ
れをやりました。

ワガ身ヲツメツテ人ノイタサヲ知レ。

第二十四 よい日本人

私どもはつねに天皇陛下・皇后陛下の御恩
をかうむることのふかいことを思ひ、忠君ちゅうくん
の心をはげみ、法令を重んじ、君のため國の
ために、忠ゆうなはたらきをして、臣民しんみんのつ
とめをつくさなければなりません。
又おやの恩のふかいことを思ひ、父母にか

うかうをつくし、そせんをたつとび、兄弟な
かよくし、じんるゐの人によくまじはらな
ければなりません。

友だちにはしんせつにしてたすけあひ、人
にまじはるには、けんそんて、ぎやうぎよく
し、しやうぢきで、やくそくをまもり、人から
うけた恩をわすれず、人と共同し、こうえき
に力をつくし、じぜんの心もふかくなけれ

ばなりません。

その外學問にせいだし、めいしんにおちい
らないやうにし、からだのけんかうにきを
つけ、しごとをはげまなければなりません。
これらのこところえをよくまもると、よい日
本人になることができます。

壽寧學修身書

第三四學年望書

大正四年二月廿五日印
大正四年二月廿七日發行
大正四年三月一日翻刻印刷

大正四年三月十日翻刻發行

行刷

定價金六錢
臨時定價金八錢

著作權所有

著作兼發行者

文部省

省

日本書籍株式會社
東京市小石川區久堅町百〇八番地¹⁵

代表者 大倉保五郎

日文部省檢查濟

印刷所 東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社

國定教科書共同販賣所

發賣所

375.9

M

広島大学図書

2500046889

